

## 研究結果報告書

植民地時期における日本推理小説の韓国的受容に関する研究

所属： 高麗大学校 日本研究センター  
役職： HK 研究教授  
氏名： 金 季杼

本研究は、推理小説という大衆文学が植民地時期に日本から朝鮮に入ってきた経緯とその様相を考察し、近代日本の推理小説が如何に韓国の推理小説へ受容されていったのかを分析したものである。

韓国における推理小説は、西洋物の翻訳である日本物を取り入れ、これをさらに翻訳するという、いわゆる「重訳」という形で、植民地時期の1910年代から始まった。特に、黒岩涙香の翻訳物が重訳されて朝鮮に紹介された例が多く、日本初期の推理小説の傾向は、そのまま、朝鮮に影響を及ぼすことになったのである。そして、1920～30年代のメジャーな総合雑誌の誌面には、日本語で書かれた推理小説が載せられており、当時、朝鮮に居住していた日本人だけでなく、日本語が読める朝鮮人の識者層でも広く読まれるようになったのである。

日本の推理小説が植民地朝鮮で早い時期に翻訳されたのが、閔泰瑗（1894～1935）の『哀史』である。『哀史』はヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』（*Les Misérables*）を翻訳した黒岩涙香の『噫無情』を、1918年に、閔泰瑗によってさらに朝鮮語に翻訳されたものである。追跡をモチーフとしており、1910年代に、「偵探小説」が大衆の関心を引いていたなかで、広く流布した。ところが、黒岩涙香の『噫無情』も、また、『噫無情』を底本にした閔泰瑗の『哀史』も、翻訳スタイルは翻案に近い形であった。つまり、語り手が自由にテキストに干渉して語り、内容の添削も自由に行われている。こうした翻案のスタイルは、現地に合わせて創作領域を最大限に確保したいという翻訳者の狙いが込められた翻訳ぶりでもあり、当時の大衆読者を広くつかむことに成功したといえる。こうした例は、閔泰瑗の他にも、李相協の『貞婦怨』（1914～15）にもあらわれている。「貞婦怨」は黒岩涙香の『捨小舟』を再翻案したもので、家庭小説の形をとりながら、推理小説らしいプロットで出来上がっている。この小説が大衆的な人気を集めたのを機に、李相協は偵探と冒険の性格を合わせて持つ「海王星」（1916～17）という作品を、同じく1910年代に発表して大成功した。そして、こうした流れは、1920年代後半から

出てくる朝鮮人による創作推理小説につながっていくのである。

朝鮮は、1920年代以降、出版産業の規模が大きくなり、同人誌を中心に雑誌発刊も盛んになっていき、近代大衆読者層が確立される。こうした雰囲気の中で、大衆の娯楽物として推理小説が大衆化しており、1929年にはもう朝鮮初の創作推理小説も出てくるようになる。これらの推理小説は、新聞小説として連載された例が多く、大衆の主な読み物として享受されたのである。日本を通して西洋の近代を欲望した朝鮮人の植民地的な日常が、日本から入ってきた推理小説の受容において確認できるのである。

#### 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

現在、論文投稿中。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『日本推理小説事典』(高麗大学校日本研究センター・日本推理小説事典編纂委員会、学古房、2014.3)の「黒岩涙香」の項目他、本研究と関連する内容を執筆した。また、韓国に影響を及ぼした黒岩涙香の推理小説4編を翻訳し、単行本として発刊準備中である。